

京都府和束町

京都おぶぶ茶苑合同会社

農業との
多様な
関わり

海外向け発信による
インバウンドの横展開



取組内容

○ 日本茶を世界へという理念のもと、国内外でのPR活動や日本茶を普及させるため地域と連携したイベントに取り組む。また、インターシップで若者を受け入れるなど、積極的なビジネス支援を行っている。

取組に至った経緯

- 2004年通販サイト「京都おぶぶ茶苑」を開設し、日本茶(荒茶)を世界各国へ販売。
- 日本茶の魅力を世界中に伝えるため、積極的に情報発信を行う。

取り組む際に生じた課題と対応

- 海外での日本茶の知名度が低く、販売が低迷。茶文化を含めた普及啓発が必要と感じた。
- 国内外から会員を募り「茶畑オーナー制度」を確立。日本茶体験のツーリズムやインターシップに取り組むインバウンドによる関係人口の創出につなげている。
- 一般社団法人国際日本茶協会を立ち上げ、海外での日本茶ビジネスの拡大や日本茶文化の普及につながるセミナーやイベントを行っている。



年間3,000人以上のインバウンド
向けツーリズムを受け入れ

取組の成果(受賞等)

- 令和3年第8回「ディスカバー農山漁村の宝アワード」において「特別賞 一食ブランド賞」を受賞
- 内閣府が主催するCJPFアワード2025において「大阪・関西万博特別賞」を受賞

今後の展望

- 日本の伝統文化を伝え新たな販路拡大のため、インターン生を中心とした情報発信を行う。
- 抹茶加工場の新設等により、インバウンドや海外の抹茶需要の増大に応える。

農業との
多様な
関わり

兵庫県新温泉町

農事組合法人アイガモの谷口



すべてはお客様の笑顔のために

取組内容

- 平成4年より農薬や化学肥料に頼らない、アイガモを使った自然循環農法に取り組む。
- アイガモの採卵、孵化などの一貫飼育を実施。田植え、稲刈り等の消費者向け農作業体験イベントの開催。
- 捨てるもののない農業の実践と人との有機的なつながりを重視し、農産物の生産から加工・販売を実施。
- アイガモの食鳥処理場を自社敷地内に建設し、飼育から食肉加工を一貫管理。
- 令和6年4月、おにぎりの店「おむすび百生」を神戸市三宮にオープン。

取組に至った経緯

- 昭和も終わりのころ、米作りの生産性を上げるために化学肥料や農薬を多用することに疑問を感じて、平成4年、自然の摂理を取り入れた農業を目指し、アイガモ等を活用した自然循環農法を開始。
- 自然循環を生かした農業を実践し、将来に残すことのできる企業体になりたいとの思いで平成14年に家族経営体から、農事組合法人を設立。

取組の成果(受賞等)

- 平成13年度 全国環境保全型農業コンクール 優秀賞
- 平成14年度 全国農業コンクール 農林水産大臣賞
- 2025大阪・関西万博 ひょうごフィールドパビリオンのSDGs体験型地域プログラム(自然循環農法体験)認定

今後の展望

- 経営規模拡大も大事ではあるが、社員がやりがいを持って取り組めるよう、飲食、農泊等の来て、見て、体験できる新たな価値(イノベーション)を見出していきたい。



兵庫県丹波篠山市

株式会社丹波たぶち農場

農業との
多様な
関わり

丹波の恵みと彩りを大切に
環境に配慮した持続可能な農業を



取組内容

- 主力である米の無農薬栽培をはじめ、イチゴ狩り・黒大豆枝豆の収穫体験や市民農園の開設を通じた消費者との交流など、農業の魅力を発信し共有する取組を行う。
- 黒大豆でのGLOBAL-GAP認証取得により、社内労働環境が大きく改善するとともに、農薬や化学肥料を削減した土づくりにより、環境に配慮した農業として自然にも体にも優しい持続可能な農業を実践し、良品質な農産物を消費者に提供。
- 法人化により、生産部門と経営部門の役割分担を明確化し、雇用の創出や効率的な分業化を実現。

取組に至った経緯

- 丹波の地から大地の恵みを育て届けることで社会に貢献するため、前代表が昭和40年代に1haの規模でなすやピーマンの生産を開始。平成14年に農事組合法人を設立、令和4年に株式会社化して現在に至る。
- 水稻65ha、黒大豆(枝豆含む)12ha、大豆4ha、小豆等2haを栽培。従業員7名、パート8名、季節雇用数名。

取組の成果(受賞等)

- 平成26年度 全国優良経営体 農林水産省経営局長賞
- エコファーマー認定者
- 「丹波黒」生産者で構成された「B・B LINK(株)」代表取締役

今後の展望

- 経営面積や受託面積の増加を想定し、スマート農業の積極的な活用や、生産技術の向上による農産物の高付加価値化を目指す。
- 2025年日本国際博覧会(大阪・関西万博)に向けて、多くの人々が丹波篠山市を訪れてくれるようなキャンペーン等を展開。

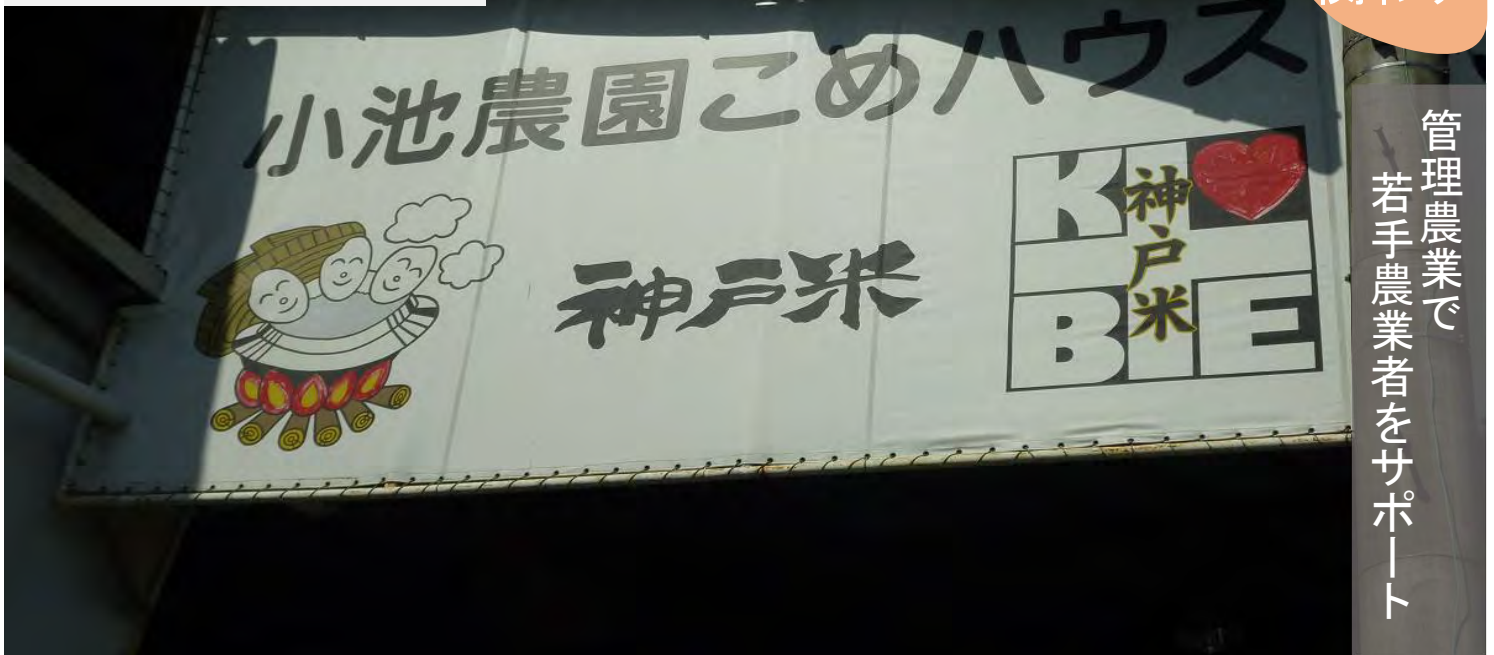


丹波黒大豆枝豆の収穫体験

兵庫県神戸市

(株)小池農園こめハウス

農業との
多様な
関わり



管理農業で

若手農業者をサポート

取組内容

- 「Kobe Foo Style」を立ち上げ、農家と都市住民をつなぐ小粋な神戸風・食スタイルを提案。収穫体験ツアーや企業の福利厚生イベント、大学と連携したイベントを企画・運営し、神戸米や地元食材、農業の魅力を発信。
- 独立して法人化を目指す新規就農者を雇用し、経営ノウハウを伝授。
- 地域の新規就農者へ経営アドバイスをしながら、高収益高付加価値作物の生産を推進。また、農業機械を貸し出して経営初期の経費負担を軽減し、その代わりにオペレーターとして労働力を提供してもらう「管理農業」を実践。

取組に至った経緯

- 米ブランドの少ない神戸市でブランド化を図るため、2010年に「神戸米」のロゴを商標登録。2011年に法人化。国産の飼料を地場で消費するため酪農家のニーズに応じて飼料作物を継続して提供。
- 地域を守るため、地域に信頼される新規就農者の育成は使命と考えており、就農初期に品目を限定して高額な農機を購入するのはリスクが大きすぎるため、軌道に乗るまでは機械を借りて取り組んだ方が良く考え、その対価を労働力として提供してもらう仕組みを考案。

取り組む際の対応

- 米は「兵庫県認証食品」を取得し「神戸米」のブランドで販売。新しい作型モデルとして耕畜連携に取り組み、デントコーンの後にキャベツを栽培（デントコーンは直根であり、後作のキャベツの生育も良くなる効果がある）。
- 連携する新規就農者とともに少量多品目生産により、リスク分散をした上で、物流を集約・一本化して共同販売体制をとり、コスト軽減と一定のロット規模の確保を実現。

今後の展望

- 小さな法人の経営体の集まり（クラスター）を作り、引き続き、機械・資材などの集約化・業務の分業化、物流の集約を図っていく。
- 依頼に基づいた「受注生産型農家」を目指し、新たな高収益作物の生産で収益を拡大。



和歌山県那智勝浦町

色川地域振興推進委員会

農業との
多様な
関わり

移住受入の先進地色川地区で、
千年続いてきた歴史や風土、
「色川らしさ」を次世代につなぐ



農業体験交流の様子



那智勝浦町大野地区

取組内容

- 色川地区区長連合会が設置した「色川地域振興推進委員会」（以下、委員会という。）が窓口となり、新規定住希望者や農業体験希望者などの受入を実施。委員会は、定住促進の活動を中心に地域活性化に向けた住民の取組を後押し。
- 委員会では定住促進班を設け、組織的な定住希望者の受け入れを実施。移住希望者には定住訪問プログラムを用意し、滞在中に15軒の地域住民を訪問し、面談を通じた相互理解の機会を提供。また旧小学校を改修して町が整備した「籠ふるさと塾」を定住・体験交流の滞在拠点とし、定住希望者には最大1年間の入所期限を設け、色川の生活・文化を体験しながら、空き家・農地の確保を目指してもらっており、定住に向けた段階的な支援が移住後の円滑な定住につながっている。
- ホームページ「ふるさと色川」の開設、地域新聞「ほっと色川」を発行するなど、地域内外への情報発信が住民全体で展開されている。
- 40年以上前から移住者を受け入れており、地区人口約310人のうち6割近くが移住者となっている。一方で地元住民の減少と高齢化は著しく、地域らしさを繋いでいく難しさに直面している。

取組に至った経緯

- 地区人口の減少・高齢化が顕著で危機感を抱いた色川地区は、より強力に地域の活性化を図る必要があるとして、色川地区区長連合会が委員会を設置した。平成3年には定住促進班を設け、新規定住者の受け入れ、体験交流活動などの取組を組織的に行うことにシフトした。

取組の成果（受賞等）

- 平成26年度第1回ディスカバー農山漁村（むら）の宝に選定

今後の展望

- 令和4年度に採択された総務省「過疎地域等集落ネットワーク圏形成支援事業」を活用し、空き家の利活用、耕作放棄地の増加、伝統・文化の担い手確保等の地域課題の解決に向け、住民自らが主体となった地域活性化の活動をスタート。千年以上の歴史を有する色川の「地域らしさ」を次世代につなげるとともに、誰もが暮らしやすい「住みよい村づくり」を目指したい。



定住・体験交流拠点「籠ふるさと塾」

滋賀県野洲市

須原 魚のゆりかご水田協議会
せせらぎの郷

農業との
多様な
関わり

琵琶湖と共生する
地域・文化の伝承と
水田農業の発展

世界農業遺産認定

水路を遡上するコイ



取組内容

- 琵琶湖のほとり野洲市須原で自然の再生・生きものと共生する水田農業を目指し活動。
- 農業が合理化・効率化される中、琵琶湖の生きものとつながる農村の原風景を取り戻しつつ、農業経営が継続できるよう、水田と琵琶湖をフナやコイなどが行き来する水田で作られる「魚のゆりかご水田米」や日本酒「月夜のゆりかご」の製造・販売を実施。
- 非農家や県内外の都市部住民も参加して稲作体験やオーナー制度を通じ、命や自然を大切にする価値観を共有する活動を推進。

取組に至った経緯

- 農業の効率化等で失われてしまった、琵琶湖の生きものとつながる農村の原風景を取り戻し、琵琶湖周辺で普通に見られていた人と生き物が共生する水田農業の成り立ちを復活させるという思いで取り組みを開始。

取組の成果(受賞等)

- 都市住民との交流を通じた、地域住民の自然環境に対する意識向上、環境と経済への発展を視野に入れた活動が展開され、平成27年ディスカバー農山漁村の宝第2回選定地区となり、官邸での表彰式に参加。
また、当時代表の堀彰男前会長(以下、「堀前会長」という。)は、令和3年ディスカバー農山漁村の宝第8回近畿農政局長賞個人賞受賞。
- 令和4年国連食糧農業機関(FAO)世界農業遺産に「森・里・湖(うみ)に育まれる漁業と農業が織りなす琵琶湖システム」(以下、「琵琶湖システム」という。)の一環として認定。
- 堀前会長は、「琵琶湖システム」で重要な側面となる県内各地の「魚のゆりかご水田」の主導的な役割を担い、出前授業等で若い世代に引き継ぐ活動の功績が認められ、令和5年度滋賀県農林水産功労賞(個人賞)受賞。

今後の展望

- 須原の豊かな自然を次世代に受け継いでいくとともに、土地と一緒に受け継いできた文化を次の世代に受け継ぐために、郷全体の活動として取り組む。
- 世界農業遺産に認定された「琵琶湖システム」をせせらぎの郷として積極的にPRしていく。



大人気の「魚のゆりかご水田米」と
純米酒「月夜のゆりかご」



いきもの観察会

滋賀県大津市

仰木自然文化庭園構想 八王寺組

農業との 多様な 関わり

棚田の保全活動を通じて
地域を元気に



取組内容

- 「しが棚田ネットワーク」と連携してボランティアの受入やオーナー制度を活用し、耕作放棄地の草刈りや復田など棚田の保全活動を21人のスタッフで実施。また、棚田に至る水源の確保のため、比叡山の山中を流れる水路の維持・管理も行っている。
- 棚田米100%の日本酒販売、高校や大学への学習田の提供、また、地元住民と棚田オーナーやボランティア活動参加者との交流会における餅つきやしめ縄作りの披露などにより、交流人口の拡大、地元の若者世代へ昔からの技術継承を通じた地域活性化に取り組む。
- 滋賀県立北大津高等学校、滋賀県立北大津高等養護学校及び成安造形大学と提携しており、これらの学生に学習田を提供し食育の場として活用いただくことで、次世代に棚田の価値を伝え、関係人口の増加に取り組んでいる。



棚田オーナーによる田植え

取組に至った経緯

- 1200年の間、ほぼそのままの形状で綿綿と歴史を繋いできた棚田であるが、時代と共に地域で耕作放棄が増加する現状を目の当たりにし、2007年2月、上仰木農業組合、組合長、OB、若手農家など15人が集まり、「地域農業の後継者対策」「農地保全」「地域活性化」の取組を始めた。
- 滋賀県の棚田ボランティア受入地区として、ボランティアを受け入れてきたが、さらに活動を継続させていくために、棚田オーナー制度を始め、参加者も年々増加している。

取組の成果(受賞等)

- 令和2年5月、八王寺組を含む仰木の棚田は、県内初の国の指定棚田地域に指定
- 令和4年1月、第5回近畿「ディスカバー農山漁村(むら)の宝」に選定
- 令和4年3月、八王寺組を含む上仰木棚田は、つなぐ棚田遺産に選定



棚田米を原料にした純米酒

今後の展望

- 「上仰木棚田米」としてブランド化し、地域の魅力を発信するとともに、付加価値を付けて販売することで、地域就農を促し後継者を確保する。
- 仰木学区まちづくり協議会主催で地元の小学生向けに田植えや稲刈りの体験、生き物調査を実施しており、これからの日本の農業や食と環境についての理解と関心を高めていく。

NPO法人
愛のまちエコ倶楽部

菜の花エコプロジェクト

農業との
多様な
関わり食とエネルギーの
地産地消を目指して

取組内容

○ 菜の花エコプロジェクト

転作田及び耕作放棄地を有効活用して栽培した菜種から、食用菜種油“菜ばかり”を東近江市の特産品として製造。搾り粕も肥料として、お茶栽培を始めとした地域農業に活用されている。

また、市内の廃食油を回収し、琵琶湖を守る活動としてせっけんを製造したり、バイオ燃料を精製して地域エネルギーとして活用するなど、1998年から資源循環のシステムを構築している。

○ 市内の稲作によって出るもみ殻をくん炭に加工し、土壌改良材として農業に活用。炭素貯留効果で、2022年からJ-クレジット申請。

○ 農村活性化事業

新規就農支援(果樹園継承・集落営農担い手支援)・農業体験企画・農家民泊推進活動ほか

取組に至った経緯

○ 琵琶湖の富栄養化に端を発した『せっけん運動』(リンを含む合成洗剤の使用をやめて粉石けんを使おうという運動)を契機に、東近江市愛東地区で地域資源循環システム『菜の花エコプロジェクト』を確立。プロジェクトの拠点である東近江市『あいとうエコプラザ菜の花館』の指定管理者として、循環の実践を担っている。行政・市民との協働を強めとしながら、NPOならではの展開の仕方を取組を広げてきた。農村活性化事業もNPOの独自事業として設立以来実績を重ねている。

取組の成果(受賞等)

○ 地方自治法施行70周年記念総務大臣表彰受賞(2017年)、第11回毎日地球未来賞・大賞(2022年)、第11回グッドライフアワード環境大臣賞最優秀賞(2023年)ほか

今後の展望

- くん炭やバイオ燃料の農業利用を推進し、農業分野でのCO₂削減に貢献していく。
- 農業体験、農家民泊コーディネート、移住・就農支援等を通して、多くの方に農ある暮らしの選択肢を提供する。

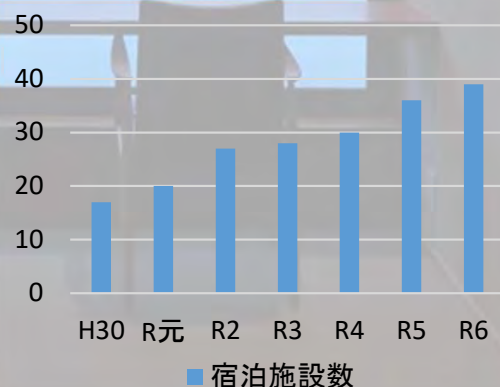


京都府伊根町

伊根浦地区農泊推進地区協議会

農業との
多様な
関わり

泊食分離で
舟屋群が宿泊施設へ



取組内容

- 宿泊と食事提供施設を分離することで、役割分担により個々の専門性を高め、宿泊者へ高度なサービスを提供。宿泊業に専念できることで、重要伝統的建造物群保存地区の舟屋等が「一棟貸し」スタイルの簡易宿所として改修・運営。更に体験メニューの提供により地域内の農業、水産業の振興に貢献。

取組に至った経緯

- 伊根浦地区では、約230軒の舟屋群が重要伝統的建造物群保存地区の選定を受けているが、宿泊営業している施設は、最盛期の26軒から平成29年には15軒まで減少し、空き家も増加。
- 一方、近年「舟屋」の知名度が世界的にも高まり、多くの観光客が来訪し「伊根に泊まりたい」というニーズが増加。

取組の成果(受賞等)

- 第2回近畿「ディスカバー農山漁村(むら)の宝」(2018年)
- 第13回観光庁長官表彰(2021年)
- 第9回農林水産省「ディスカバー農山漁村(むら)の宝」(ビジネス・イノベーション部門)優秀賞(2022年)
- 農泊事業の結果、空き家となっていた舟屋等を活用した宿泊施設が近年増加し、「通過型」から「滞在型」観光へ移行。地区の課題と観光客のニーズの双方に対応でき、地区の観光産業に大きく貢献。



伊根湾に沿って立ち並ぶ「舟屋」

今後の展望

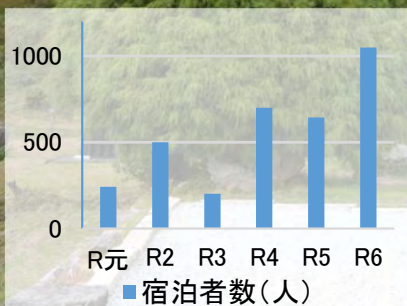
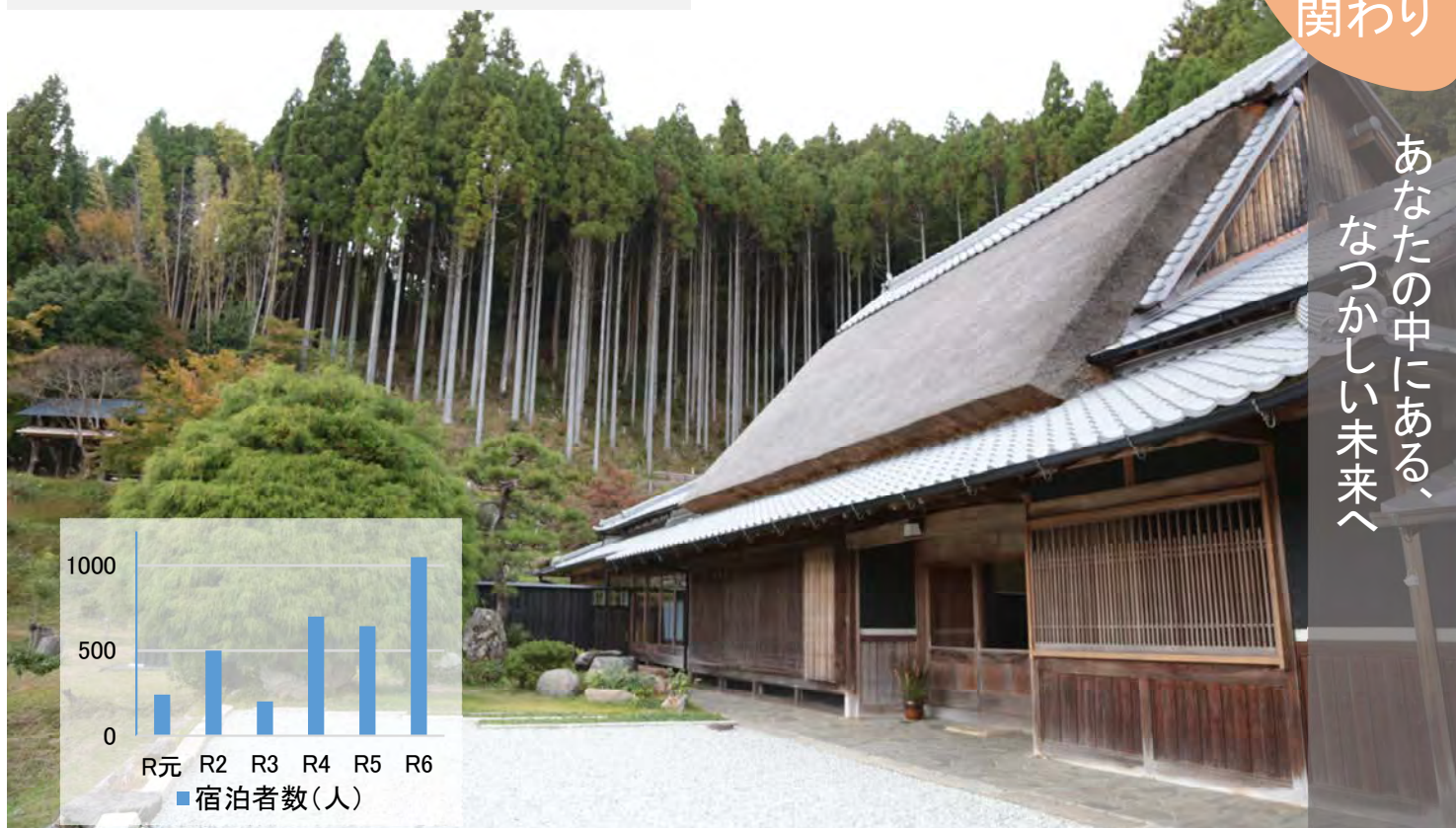
- 宿泊施設開業後における提供サービスの質向上、緊急情報伝達手段の確立、飲食店等の提供メニューへの地域内食材調達率の向上及びその食材価値をどのように伝えていくかなど、現在抱えている課題の解決に向けて協議会一丸で取組を推進。
- 持続可能な観光について観光事業者と協働で理解を深め、取組を推進。

奈良県宇陀市

宇陀市古民家活用地域活性化協議会

農業との
多様な
関わり

あなたの中にある、
なつかしい未来へ



取組内容

- 奈良県宇陀市にある宇陀市古民家活用地域活性化協議会は、八滝地区において「農山村滞在型旅行」を受け入れ、里山の自然を中心としたサステナブルな地域社会での滞在を提供するオーベルジュ「うだ薬湯の宿 やたきや」を開業。建物周辺のランドスケープ整備も取組に並行して実施。「オール宇陀」をテーマとして、やたきやの従業員やランドスケープ整備における作業員には宇陀市民を採用。やたきやで提供する食材も宇陀市内で調達できるものを取り揃えるなど、地域の雇用創出や経済効果を生み出す。

取組に至った経緯

- 平成31年2月より宇陀市の産官民の賛同者を募り、特に空き家の目立つ「八滝地区」の住民をはじめ地元の民宿経営者、飲食店経営者、観光農園経営者、一般社団法人古民家再生協会などの参画によって活動をスタート。
- 「農山村滞在型旅行」により薬草や里山風景を観光コンテンツとして活用し、インバウンドを含む国内外の観光客を当地「大和高原」へ呼び込むことで、地域の所得向上と活性化を目指す。

取組の成果(受賞等)

- 第11回「ディスカバー農山漁村(むら)の宝」に選定(2024年)



「ディスカバー農山漁村(むら)の宝」受賞式の様子

今後の展望

- 農園・商品・宿泊施設が連携し、独自性とストーリー性の高い地域体験を提供。農園での体験イベント、収穫した薬草を使ったクラフトコーラの試飲会、体験後に地域に浸るための宿泊施設の利用など、地域資源を一体的に楽しめる仕組みづくりを目指す。
- 新たにサウナ施設の整備やメニューのブラッシュアップを通じて施設価値を高める一方、地域住民が気軽に訪れられるマルシェを定期開催し、高品質な滞在体験と日常的な地域交流の場づくりの両立を図る。

和歌山県田辺市

株式会社 秋津野

農業との 多様な 関わり

地域の将来を見つめ、
農泊推進を柱に持続可能な
地域づくりへの挑戦



取組内容

- 株式会社秋津野は、秋津野農泊推進協議会の中核法人として、上秋津小学校の旧校舎(令和4年2月国指定文化財 登録有形文化財に登録)を活用した都市と農村の交流施設「秋津野ガルデン」を運営。持続可能な地域づくりを目指し、地域の出資者とともに、農泊を推進し、農家レストラン、外国人の修学旅行や地域づくり研修の受入れ、みかんの樹オーナー制度等の交流事業に取り組む。
- 地域コミュニティの活性化を目指し、ICTオフィスを建設、和歌山県、田辺市と共に ICT関連の企業を誘致。
- 令和2～3年度に中山間地における果樹(かんきつ・梅)生産のスマート化プロジェクトの実証に取り組む。
- 令和4年に株式会社秋津野が構成員として参画し、農村RMO 秋津野地域づくり協議会を設立。農用地保全・地域資源活用・生活支援について将来ビジョンを定め、3年間の実証事業に取り組む。

取組に至った経緯

- 小学校の移転計画が持ち上がった平成14年を機に、住民と和歌山大学が協働して地域のマスタープランを策定。このマスタープランに基づき、都市住民との交流推進に向けた地域づくりを実践。
- 後継者不足や高齢化が加速していることを背景に、労働力不足の課題解決に向けたコンソーシアムの実証代表として、中山間地域でも実現可能なスマート農業の実証に取り組む。

取組の成果(受賞等)

- 平成27年度第2回ディスカバー農山漁村の宝に選定
- 令和元年第16回オーライ！ニッポン大賞でグランプリ(内閣総理大臣賞)を受賞

今後の展望

- 地域資源を最大限に活用した里山周遊ツーリズムの充実、柑橘類加工品の製造・販売及び高齢者のコミュニティ対策などの取組を通じた持続可能な産業と集落の実現に向けて、農村RMO形成モデル地区として山積する地域課題を早期に解決するため、協議会参加組織と連携しながら、計画から実行・実現が素早く行える地域運営組織を目指していきたい。



農業体験で農家さんとふれあい

滋賀県長浜市

ONE SLASH株式会社

“ RICE IS COMEDY® ”
農業の面白さは無限大∞

農業との
多様な
関わり



取組内容

○ “RICE IS COMEDY®”

農業プロジェクトを通して、一般的にネガティブに捉えられがちな農業を面白くポジティブに捉えてもらえるよう、地元を盛り上げるユニークな活動に取り組む。

具体的な取組として、街中に突然現れ羽釜と薪でお米を炊いて、道ゆく人々におにぎりを一方的に振る舞うゲリラ炊飯等の取組により、地元米をブランディングして農業所得の向上に寄与している。

また、農業体験イベント、バイオマスプラスチック用の新市場開拓用米の生産、地元学校への講演等を実施。地元の農地を守る兼業農家としても耕作放棄地の解消に向けた取組を実施している。

取組に至った経緯

○「自分たちを育ててくれた地元(西浅井町)からおもしろいことを始めたい」が原点となり、これらの活動に取り組むようになった。

取組の成果（受賞等）

- 令和5年度「ディスカバー農山漁村（むら）の宝（第10回）コミュニティ・地産地消部門」を受賞。
- 令和5年度「第11回グッドライフアワード（実行委員会特別賞）」を受賞。
- 水稻の作付により耕作放棄地等の解消が図られるとともに、農業体験イベントの開催等により地域が活性化。



ゲリラ炊飯の様子



収穫体験の様子

今後の展望

- 他業種との連携等、発想の転換により一層の農業の可能性を探る。
- 農業だけに捉われず、あらゆる手段を使って持続可能な地域モデルを作る。
- 地域の子供たちが地元の良さに気付きポジティブに育ってくれるような、農を学べる学校を作る。

滋賀県東近江市

滋賀県立 八日市南高等学校

農業との
多様な
関わり

わがまちの魅力を発掘して
伝統を守る



「八南茶園」で茶摘みをする生徒達

取組内容

- 室町時代から続く政所茶は、急斜面に植えられ現在も手摘みが主流かつすべて無農薬栽培。
- 本校が借り受ける茶園「八南茶園」の取組は、伝統の継承、耕作放棄地の解消、地域景観・環境保全に貢献。
- 政所茶の栽培には政所茶生産振興協会、玉露棚の設営には森林組合等、製茶作業についてはJAグリーン近江が協力。
- 生徒が携わった商品を地元の道の駅で販売することは、生徒の学習とともに地域住民との交流による茶園農家の活性化につながり、玉露栽培を行う農家の増加に寄与。
- 製茶過程で出る商品にならない未利用茶葉と琵琶湖八珍であるゴリを使った「政所茶漬け」を地元飲食店と共同開発し、県内の商業高校と連携して全国販売。また、地元食材を提供する期間限定レストランを開催。

取組に至った経緯

- 東近江市政所町で栽培されている「政所茶」は、かつて「宇治は茶所、茶は政所」と茶摘み歌にも詠われたが、過疎高齢化が進むとともに、急傾斜の茶畑のため大規模展開ができず、栽培農家が減少。
- そのため、平成27年から放棄された茶園を借り受け、「八南茶園」を開き、生産が途絶えかけた玉露を復活させ、生産、加工、販売をし、地域に貢献。

取組の成果(受賞等)

- 令和5年度近畿農政局「ディスカバー農山漁村(むら)の宝」(第7回)に選定。

今後の展望

- 農家から政所茶の未利用茶葉を買い取り、茶葉と東近江市内の生産物を使った商品開発・販売を行うことで、さらなる農家所得の向上と地域の活性化を図る。
- 政所茶関連の商品を発信することにより、消費者に政所茶及び政所町の良さを知ってもらう活動を実施。



未利用の政所茶を有効
利用した「政所茶漬け」

大阪府堺市

一般社団法人泉北レモンの街ストーリー

農業との
多様な
関わり

泉北をレモンの街に
レモンを泉北の特産品に



取組内容

- 泉北のまちのあちこちで、レモンを見ることができる風景をつくるため、レモン苗木の植樹推進活動を行う。
- 2016年に「泉北レモン®」を商標登録。泉北の特産品として栽培、商品づくりに取り組む。
- 「泉北レモン®」を楽しんでいただくイベントとして、「泉北レモンフェスタ」を毎年3月に開催。

取組に至った経緯

- 西日本最大の泉北ニュータウンに住む法人代表が、自宅の庭にある2本のレモンの樹が毎年300個以上の実をつけることに気づき、当地区がレモンの爽やかな香りに包まれる街になるとともにレモンを特産にできると確信したことをきっかけに、活動を開始。

取組の成果(受賞等)

- 令和元年度 第3回 さかい市民活動協働大賞 大賞受賞
- 令和5年度近畿農政局「ディスカバー農山漁村の宝」(第7回)に選定

今後の展望

- 「泉北レモン®」の収量を増やし、たくさんの方に泉北レモンを手にとっていただく。
- いろいろな「泉北レモン®」の特産品づくりに取り組み、誇れるふるさと泉北をつくる。



レモン植樹の様子



「泉北レモン®」の商品

滋賀県栗東市

明日の走井^{はしり}を考える会

農業との
多様な
関わり

棚田でつながる
都市農村の交流と
豊かな村づくり



田植え体験の様子

取組内容

- 地域内外から様々な人を受け入れ、集落と一体になり、自然と歴史・伝統が息づいた地域づくりを実施。
- 棚田と並ぶ地域の道沿いに紫陽花を植栽し、美しい景観づくりに取り組む。
- 棚田での田植えや稲刈り体験、観光農園、ホテル観賞会、農村婚活、秋の収穫祭「ハーベスタ・イン走井」、また伝統行事を継承した「左義長」と、様々なイベントを実施することで、都市農村交流や地域内の活性化を推進。
- 近隣大学との連携や都市住民との交流を通じて関係人口の増加に取り組む。
- 中山間地の綺麗な水、寒暖差のある気候を活かし、減農薬・減化学肥料で安心安全な「こんぜ清流米」を生産し、周辺地域の団体やJAと共にブランド化を図り販売。

取組に至った経緯

- 過疎化が進む走井集落の生き残りを考え、自治会事業を側面から支援する団体として平成28年に発足。
- 住民だけの力で集落を活性化することは不可能と考え、訪れる方々に楽しんでもらえる里づくりを目指し、棚田を活用した取組を開始。

取組の成果(受賞等)

- 令和3年度「豊かなむらづくり全国表彰事業」で農林水産大臣賞受賞。
- 走井棚田が「つなぐ棚田遺産」認定。
- 令和6年1月、滋賀県事業「しがのふるさと支え合いプロジェクト」により、農村の活性化や新たな価値の創造を目的に協働活動を実施している立命館大学経済学部、「つなぐ棚田遺産(人と人をつなぐ部門)」における感謝状が贈呈された。
- 近畿農政局「ディスカバー農山漁村の宝」(第8回)コミュニティ・地産地消部門に選定。

今後の展望

- 令和2年2月、走井集落を含む金勝(こんぜ)地域の棚田が棚田地域振興法における指定を受け、金勝地域全体で棚田地域協議会が設立されたことから、今後「明日の走井を考える会」の活動が地域全体に広がっていくことが期待される。
- 活動により集落内のコミュニティは盛んになり、関係人口を増やすことで地域の活性化が図られていることから、今後も次世代につなぐ活動を続けていきたい。



美しい景観を楽しめるアジサイロード



近畿農政局「ディスカバー農山漁村の宝」選定証授与式

兵庫県神戸市

兵庫楽農生活センター

農業との
多様な
関わり

気軽に「農」を学び、体験し、実践



取組内容

○ 兵庫楽農生活センターでは、県民誰もが気軽に「農」を学び、体験し、実践できる場所を提供。

取組に至った経緯

- 兵庫県は、農林水産業体験や農山漁村との交流などを通じて、食や「農」に親しむライフスタイルを「楽農生活」として提唱しており、県民誰もが「楽農生活」の体験や実践ができる拠点施設として、兵庫楽農生活センターを設置。
- 就農支援などの人材育成や学習を支援する「楽農学校事業」と、栽培、加工、食などの体験や交流を支援する「楽農交流事業」の2つの柱で事業を展開。



田植え体験



丹波黒枝豆の収穫体験

取組の成果

- 楽農学校事業では、①生きがい農業コース、②半農半Xコース、③就農コース、④有機農業塾、の4コースがあり、本格的な農業経営をめざす就農コースでは、平成16年度から令和6年度(第20期生)までに297人が研修を修了し、うち263人が就農(就農率は89%)して地域の担い手として活躍。
- 楽農交流事業では、親子農業体験教室で延べ3万人が、お米や丹波黒枝豆のほか各種野菜の栽培、収穫、加工、試食までの一連の作業を体験しており、次代を担う子供たちに、食と農の大切さを学び自然にふれあう機会を提供。

今後の展望

- 将来にわたって農業・農村を守るためには、実践者の裾野の拡大、つまり、農業者の育成にとどまらず、農業・農村に関わる人や理解する人を増やすことが大事。
- このため、楽農学校事業の取組を充実強化し、新規就農の促進、他の仕事を組み合わせた働き方を目指す半農半Xコースの創設、有機農業の拡大等に繋げるとともに、今後も民間事業者・地元農業者グループ等の事業参加者と連携し、気軽に「農」の大切さを学べる各種体験メニューを充実。

奈良県明日香村

あすか夢耕社「あすかオーナー制度」

農業との
多様な
関わり

オーナー制度で地域と共に
明日香村の歴史と景観を守る



NPO法人明日香の未来を創る会
理事長 小倉正美さん

取組内容

- 「あすかオーナー制度」には、指定棚田地域の「稲渚の棚田」での米作りや伝統行事を体験する棚田オーナー、みかんの摘果や収穫を体験する一本木オーナー、サツマイモの植え付けや収穫を体験するいもほりオーナー、柿の摘蕾・摘果や収穫を体験する柿オーナーなどがあり、地域と消費者の交流を深め、明日香村の景観保全につながる取組として実施。
- 棚田オーナーは稲渚地区の住民で組織する「NPO法人明日香の未来を創る会」、その他のオーナーは各農家が参加者への指導と圃場管理を行い、あすか夢耕社は募集案内や情報発信などこれらの活動を支援。

取組に至った経緯

- 農業の担い手が不足する中、明日香村の歴史と景観を守るため、「農」を見つめ直し、地域の垣根を越えてサポートしてもらえる消費者を呼び込み、地域と共に棚田などの景観保全に協力を得ながら収穫の喜びを感じてもらうことを目的に、1995年に「あすかオーナー制度」を開始。

取組の成果(受賞等)

- 第37回緑の都市賞(緑の市民協働部門) 国土交通大臣賞
- 第19回オーライ!ニッポン大賞 審査委員長賞
- 特に棚田オーナーは人気があり、参加者は家族連れやグループだけでなく、農業に関心を持つ個人参加者もいて、参加回数を重ねるごとに明日香村の景観保全の一翼を担っていることを実感している。

今後の展望

- オーナー制度運営者の高齢化が進む中、今後は消費者だけでなく企業の参加を誘致することで関係人口を増やし、棚田等の景観保全に取り組んでいきたい。



棚田オーナー(はざかけ作業)



みかんの一本木オーナー
(摘果作業)

和歌山県和歌山市

和歌山県農業協同組合 わかやま地域本部「やろう会」

農業との
多様な
関わり



県内初の男性食農サークル
「やろう会」の食育推進活動



料理教室の様子

取組内容

- 普段口にする野菜などの農作物がどのように育てられているのか、栽培の手間や苦勞を伝えることで、「食」と「農」に関心を持つきっかけ作りを目的として、「親子野菜収穫体験」を開催。圃場で収穫したトウモロコシは生のまま食べ、甘さを実感してもらい、大根、ブロッコリーなどの冬野菜は、JA女性会と連携し、野菜本来の味が伝わるよう工夫しながら調理し、参加者に試食を提供。
- 和歌山市内特産の大根、ブロッコリーの袋栽培等、体験学習に取り組む小学校や幼稚園に対して、JAと共に各学校を巡回し、担当教諭と連携しながら、植付指導や生育状況の確認、栽培管理のアドバイスや教員向けに作成した「栽培マニュアル」を配布。

取組に至った経緯

- JAわかやま わかやま地域本部の料理教室に参加した修了生を中心に、「やりたいことをやりたい時にやり、人生を楽しもう」と、平成28年に12人で「やろう会」を発足。農業は未経験ながら、JAわかやま わかやま地域本部の協力を得て会員自ら野菜を栽培。平成30年から地域住民を対象とした「親子野菜収穫体験」をスタート。反響の大きさと子供たちの笑顔から食農教育の大切さを実感し、収穫体験の開催や学校への栽培指導巡回に繋げている。

取組の成果(受賞等)

- 第7回食育活動表彰 審査委員特別賞

今後の展望

- 「親子野菜収穫体験」は今やJAを代表する人気イベントの一つになっている。これからも食農教育活動により、食に対する感謝の気持ちや地域の農業、農産物への理解が深まり、地域が活性化するように頑張っていきたい。



野菜袋栽培の巡回指導

和歌山県和歌山市

農業体験農園 太田ファーム

農業との
多様な
関わり

農業体験農園で、農を通じた
コミュニティーづくりを目指す



太田ファーム農園主

野菜の栽培状況

取組内容

- 太田ファームでは、1,795㎡、45区画の農業体験農園を運営。一般区画20㎡（36区画）のほか、小区画7㎡（9区画）の農園を用意。
- 畑で使用する鍬などの農具や、種子、苗、肥料、堆肥、支柱、敷きわら等、農作業に必要な資材は農園主がすべて準備するため、農園利用者は手ぶらでの参加が可能。
- 農園主の栽培指導に基づき、有機肥料を使った農薬を使用しない安全な野菜（春夏野菜約18品目、秋冬野菜約12品目）を栽培。
- 野菜作りが初めての方でも農業体験に参加しやすいように、農園主による栽培講習会を定期的で開催。講習内容はYouTubeで動画配信を行うとともに、休憩所に設置しているビデオモニターでも視聴可能。
- 収穫体験用に黒豆、大豆、サツマイモ、ジャガイモ、たまねぎ等を栽培。収穫祭や料理教室等の交流イベントを農園主がJAわかやま わかやま地域本部と連携し開催。

取組に至った経緯

- 農地の宅地化が進む現状に対して農地の有効活用ができないかと考え、定年退職後に和歌山県農林大学校就農支援センターで野菜栽培の研修を受講。JAわかやま わかやま地域本部やNPO法人全国農業体験農園協会の支援を受け、平成30年4月に農業体験農園を27区画で開園。

取組の成果

- 農園利用者に対する農業理解の促進、交流会を通じた新たなコミュニティーの醸成、ベテランの農園利用者がリーダーとなり、都市農業の新たな担い手として活動。

今後の展望

- 消費者が土に触れ、野菜を育て、新鮮な野菜を安心して食べることの喜びを感じてほしいという思いから、農業体験農園が食と農の地域交流の場になることを目指したい。
- 月2回程度の来園で栽培が可能な野菜（じゃがいも、トウモロコシ、さといも等）を9区画ある小区画のうち3区画で始めたが、ニーズが増えてくれば、今後農園面積を拡大させて取り組みたい。



資材置場（パイプハウス）に設置したホワイトボードに野菜栽培のポイントを掲示

和歌山県那智勝浦町

小阪の棚田「棚田を守ろう会」

農業との
多様な
関わり

棚田の美しい景観と棚田米作り
を未来につなぐ



第28回全国棚田(千枚田)サミット現地見学会
しめ縄作り体験の様子

小阪の棚田 米作り体験農場

取組内容

- 那智勝浦町色川地区・小阪の美しい景観と棚田米作りを未来につなぐため、地元有志が30数年耕作していなかった休耕田の復活に取り組み、平成16年に40a、78枚の棚田を復田し、米作り体験農場として棚田の維持管理に活用。
- 棚田オーナー、イベントサポーターなど様々なメンバーと協力して棚田の保全を行うとともに、農業体験イベントは、田植え(5月)、草取り(6月)、稲刈り(9月)、餅つき・しめ縄作り(11月)を毎年開催するなど、都市農村交流による関係人口の創出に取り組む。
- 令和元年度に施行された棚田地域振興法を契機に、旧色川村の各棚田地域の代表者や「棚田を守ろう会」等から構成される色川棚田地域振興協議会を令和2年に設立し、色川地域全体で棚田保全に連携して取り組む。
- 令和5年11月、那智勝浦町で開催された第28回全国棚田(千枚田)サミットでは、現地見学会の会場として杵による餅つきやしめ縄作り体験等のイベントを実施。

取組に至った経緯

- 熊野三山で有名な那智山の西側にある色川地区・小阪の棚田では、過疎・高齢化が進み、休耕田が増える中、地域の宝である棚田を守るため、平成17年に「棚田を守ろう会」を設立し、棚田の復田と保全に向けた活動を開始。

取組の成果(受賞等)

- 令和4年2月、色川の棚田群として「つなぐ棚田遺産～ふるさとの誇りを未来へ～」に認定
- 令和6年度和歌山県農林水産業賞(地域づくり部門)受賞

今後の展望

- 地元住民の高齢化と後継者不足から、休耕田は依然として増え続けていることに加えて、里地での獣害の増加が深刻な課題となっているため、近隣地域や都市部からの協力を得ながら、地域の宝である棚田の維持管理に引き続き取り組んでいきたい。



稲刈り体験イベント

大阪府八尾市

株式会社東山ベジフル

農業との
多様な
関わり



大阪と鹿児島 それぞれの
強みを活かした有機農業

大西 諒 取締役

取組内容

- 大阪府八尾市と鹿児島県鹿屋市に農場を持ち、都市部と産地それぞれの強みを活かして有機農業に取り組む。
- 大阪府では都市に近い立地を活かし、企業向け管理付き貸農園（サブスク自社農園）を運営。有機農業体験や農園運営をサービスとして提供することで、企業ブランド価値を高める取り組みを行っている。
- 貸農園を利用する企業の業種や目的は様々で、経営する飲食店での有機農産物メニューの提供、社員の福利厚生、顧客への野菜・加工品配布、SDGsに貢献する取組のPRなど多岐にわたる。
- 鹿児島県では、畑作産地を活かしてビーツを主に栽培。生産販売量は、2022年24t、2023年32t、2024年32tと大規模に生産している。生産したビーツ等は、飲食店や生協・小売店等に向けBtoBでの販売を行っている。

取組に至った経緯

- 大学を卒業後、農業法人職員や青果市場職員、有機農産物生協でバイヤーを経験。「有機農業にはビジネスとしての大きな可能性がある」と考え、親元就農。
- 平成29年には有機JASの認証を受け、有機農産物の認証事業者（生産工程管理者）となった。

今後の展望

- 消費者に農業や有機農産物に対する理解を深めてもらえるよう、農業体験等を通じて都市住民と農業を繋ぐ取組を行っていききたい。
- 将来的には、輸出やASIAGAP取得に取り組みたい。



鹿児島県の有機ビーツほ場

和歌山県海南市

FROM FARM

農業との 多様な 関わり

日本農業遺産「下津蔵出しみかん」の産地で、農繁期の農家と若者を「みかん援農」でつなぐ



「FROM FARM」 大谷代表

取組内容

- 6次産業化に取り組み、和歌山の農産物を活用した加工品ブランド「FROM FARM(フロムファーム)」を立ち上げ、和歌山県産のぶどう山椒と柚子を使ったハーブソルトを製造、販売。
- みかん収穫期の課題である労働力不足に対応するため、毎年11～12月は「みかん援農」プロジェクトに取り組み、農家約40戸と援農希望者約70名をマッチング。多様な要望に応えながら、宿泊先の提供、宿泊施設の管理、トラブル発生時の農家との調整、通勤の送迎等を行い、援農参加者と信頼関係を構築し、満足度を高く維持することで、次年度以降の援農希望者の確保に繋げている。
- 令和4年度補正「農業労働力産地間連携等推進事業」を活用し、他産地・他産業との連携による労働力確保に向けて取り組む。
- JA支所の遊休施設を活用し、地域の交流拠点としてカフェ「KAMOGO(カモゴ)」を運営。海南市下津町産の柑橘を使った生絞りジュース、地元豆腐屋の豆乳を使った揚げたてドーナツを提供、地域住民や援農者の交流の場としても活用。

取組に至った経緯

- 農業に魅力を感じることができずに、就職を機に地元を離れた経験から、「いかに地元の農業を面白くできるか」をテーマに、6次産業化を検討。平成26年に「FROM FARM」を設立。
- みかんの収穫期に人手を要する地元農家の需要に応えるため、平成29年から「みかん援農」プロジェクトを開始。

取組の成果(受賞等)

- 第51回日本農業賞「食の架け橋の部」奨励賞

今後の展望

- 年々増加する援農受入れの需要に対応するため、一緒に活動するプロジェクトの仲間を募集するとともに、援農者や宿泊先の確保に引き続き努めていきたい。
- 「みかん援農」の参加者が農業や地域に愛着をもち、移住する若者も増えている。援農が一過性の労働で終わらず、農家と若者の間に好循環が生まれ、新たに何かが起こるきっかけとなる取組にしたい。



JA支所の遊休施設を活用したカフェ「KAMOGO」の店内

和歌山県紀美野町

小川地域棚田振興協議会 (中田の棚田再生プロジェクト)

農業との
多様な
関わり

美しい棚田の自然と農業文化を
次世代に残したい



棚田の水資源を支えてきた貴重な土木遺産「竜王水」



中田の棚田

取組内容

- 令和元年に制定された棚田地域振興法に基づき、同年12月、「中田の棚田」がある紀美野町小川地域が指定棚田地域に指定され、翌年2月に小川地域棚田振興協議会を設立。同時に地域おこし協力隊(2名)、農家、移住者、地元住民など、協議会の構成員以外も参画した「中田の棚田再生プロジェクトチーム」を結成し、具体的な再生計画などを協議。棚田の自然や文化を未来に伝えるため、多様な関係者が関わりながら、棚田の再生・維持管理、イベント等の交流事業や関係人口の定着に取り組んでいる。
- 令和3年3月、登録制ボランティア「棚田サポーターズ」の募集を開始。主に町外からの参加が多く、令和6年度は約100名が登録。
- 令和2年に3aの再生田に水稻の作付を開始してから作付面積は年々増加し、令和6年産水稻の作付けは120aにまで拡大。水稻は無農薬・無施肥による自然栽培で、生物多様性の保全に配慮した生産活動に取り組む。

取組に至った経緯

- 「中田の棚田」は、中世(1425年)には稲作が行われていたことが検証できる歴史的に貴重な棚田であるが、耕作者は少なく、そのほとんどが耕作放棄された状態であった。
- 紀美野町まちづくり推進協議会のまちづくり部会で、「中田の棚田」の再生活動についての協議が始まり、「美しい棚田の自然と農業文化を次世代に残したい」という思いをもった人々が集まり、令和2年2月、小川地域棚田振興協議会を設立し、「中田の棚田再生プロジェクト」を立ち上げ、棚田の再生に向けた活動を開始。

取組の成果(受賞等)

- 令和4年2月、「つなぐ棚田遺産～ふるさとの誇りを未来へ～」に認定

今後の展望

- 棚田の維持管理には、耕作者の確保が欠かせないため、育成と定着支援に取り組みたい。棚田米販売のほか、古民家を活用したゲストハウスや交流施設を整備し、棚田を活用した観光・地域振興にも取り組みたい。このようなコミュニティビジネスから得られる資金を循環させ、持続可能な取組にしていきたい。



棚田サポーターズによる棚田再生の作業風景

和歌山県和歌山市

和歌山大学 地域交流援農サークルagrico.

農業との
多様な
関わり

農繁期の援農を通じて
地域との交流活動に取り組む



TGC和歌山にてケータリングを出品

桃の袋掛け作業の様子(紀の川市)

取組内容

- 農繁期の労働力不足が課題となっている農家への援農活動に取り組む。活動地域は県内全域で、直接連携している農家のほか高齢化が進む中山間地域を中心に活動。また、地域で開催される行事等への参加や援農活動を通じて地域との交流活動にも取り組む。
- コロナ禍で活動を自粛していた時期は、勉強会や農家との交流会をオンラインで開催。
- agrico.の活動として、「TGC地方創生プロジェクト」のひとつである「TGC和歌山2023」のバックヤードケータリングメニューをプロデュース。地域の水産会社や漁協等の関係団体と連携し、地元食材をふんだんに活用したメニューを提供。
- 令和5年度に「梅収穫スタディーケーション」に着手したJA紀南と連携し、農作業の労働力不足や消費拡大対策など、梅産地が抱える課題解決に向けた取組に参加。

取組に至った経緯

- 援農ボランティアのゼミ活動をきっかけとして、平成20年にサークルを設立し、和歌山大学承認サークルとして「地域と大学の架橋になる」ことを目標に課外活動を開始。

取組の成果

- コロナ禍においても失われなかった設立当初の志は現在まで受け継がれ、所属学生は援農を通して地域と積極的に関わっており、活動はJAや他団体と連携した取組に発展。

今後の展望

- 中山間地域の現状を知ること、当サークルの活動をきっかけとした就農や活動に関わった地域に移住をしてもらえるように、学生と地域の方々との交流を密にしていきたい。
- 援農活動とあわせて農業を取り巻く環境や、フルーツ王国和歌山県の魅力、そして当サークルの活動内容をさまざまなメディアを通じて発信していきたい。



「梅収穫スタディーケーション」で収穫作業を体験した学生による発表会と関係者との交流会の様子(田辺市)

和歌山県那智勝浦町

太田川流域農泊振興協議会 (宗教法人大泰寺)

農業との
多様な
関わり

サウナ×お寺で地域活性化
お寺を持続可能な
農林業の中心に！



太田川流域農泊振興協議会会長
宗教法人大泰寺 西山住職



太田川の川辺でテント式サウナ

取組内容

- 大泰寺は開創1200年、熊野古道沿いに立つ比叡山延暦寺の開祖最澄により開かれたお寺で、この大泰寺を宿泊施設として整備し、お寺を活用した地域活性化に取り組む。
- 1日に2組まで泊まれる宿坊が好評だったことを受け、日本初となるお寺常設のキャンプ場を整備。また、宿泊者向けの特別プランとして、写経や座禅体験のほか、テント式サウナのサービスを開始。「禅サウナ体験」は、熱行・水行・坐禅が一体となった究極の修行法として人気を集めている。
- 地域の観光課題である通過型観光から滞在型観光への転換を目指すため、「太田川流域農泊振興協議会」を発足。太田川流域を中心に活躍する食・泊・農のプレイヤーの連携により、一次産業振興と観光振興を掛け合わせた地域づくり、滞在期間の延長と消費額増加に繋がる体験プログラムの整備と情報発信力の強化に取り組む。

取組に至った経緯

- お寺を活用した地域活性化のために、令和元年から大泰寺において宿坊を開始。令和3年から川辺でキャンプ、テント式サウナなどが行えるサービスを追加し、気軽に泊まれる「アウトドアの宿坊」として「Temple Camp 大泰寺」を整備。また、檀家が所有する空き家を民泊に活用するため、令和3年に地域の仲間と「太田川流域農泊振興協議会」を発足。

取組の成果(受賞等)

- 令和4年度INACOMEビジネスコンテスト特別賞
- 令和6年2月 農泊インバウンド受入重点地域に選定
- 令和6年度持続可能な農泊モデル地域創出支援事業モデル地区に選定



地元食材の提供

今後の展望

- 熊野古道大辺路ルートにある無住寺院を宿坊化するモデルを構築することで、高野山とは趣を異にする宿坊エリアを太田川流域に形成し、インバウンドで訪れた多くの方々に、お寺に泊まりながら熊野古道を体験してもらいたい。
- リピーターの確保に向けて、農業体験、スポーツツーリズム、地域の食材を生かしたメニュー作りなど、地域の特産品や地域の魅力を伝えられる体験事業の拡大に協議会全体で取り組んでいきたい。

滋賀県竜王町

農事組合法人ジョイファーム山中

農業との 多様な 関わり

支え合う中心に農業を据え、
再生することで課題を克服しよう



コンビネーションベアラ(WCS用稲収穫機)の前で

取組内容

○ 農家・地主合わせて45戸の構成員で「みんなの力と知恵で作ろう未来のジョイファーム山中」をスローガンに、環境にこだわった水稻の作付けや水田転作として稲WCSの展開、非農家若手も巻き込んだ大型農機免許取得(6年間で15名)を推進、さらに実際の農作業機械の運転作業への参画や共同作業への参加を通じた後継者の育成、女性部を中心とした特産品の栽培・開発や自治会行事と連携し地域の親睦に取り組んでいる。

取組に至った経緯

○ 山中地区は、平地農業地域にあるものの、ほ場条件は中山間地並に厳しく、草刈りをはじめ農作業は重労働であり、少子高齢化等により農業従事者が急激に減少する中、農業機械の更新や農業の維持はもちろん、集落の神事や行事の継続の危機など、将来の見通しが暗くなった。このため、集落住民が生きがいを持って健康で明るく暮らしていける地域づくりを目指し、平成26年に農事組合法人ジョイファーム山中を設立した。



秋の収穫祭

取組の成果(受賞等)

○ 令和6年度豊かなむらづくり全国表彰事業(近畿ブロック)において、農林水産大臣賞を受賞。



若手による田植作業



ロールベールにお絵描き

今後の展望

○ 預かる農地が増加している状況もあり、若手に専従者になってもらう、もしくは農業に参加してもらえる体制を構築していきたい。
○ 新たな取り組みとして、令和7年度から町内畜産農家の採卵用地鶏の餌用に飼料用米を、直播で栽培する予定。

滋賀県守山市

もりやま食のまちづくりプロジェクト

農業との
多様な
関わり

産学官が連携し
「食と農水」をテーマに
地域活性化を図る



パール灰を使用し栽培した「もりやまびわ湖パール野菜」

取組内容

- 守山市で農水産物の生産から消費に至るまで「食と農水」をテーマとして、地産地消、食育、健康、6次産業化の各分野における取組を効果的に結び付け、新たな事業展開をすることにより、地域活性化を図ることを目的として産学官が連携し活動している団体。
- 矢島地区に伝わる在来種のかぶらを存続の危機から復活させ、「守山矢島かぶら」として滋賀県近江の伝統野菜に認定されたことを契機に、地域ブランドとして構築させる。
- 琵琶湖で養殖する淡水真珠の貝殻を「パール灰」として肥料に使用し、生産した野菜を「もりやまびわ湖パール野菜」としてブランド化に成功。農業と水産業連携の環境循環型農法がSDGsに準ずる取組として販路を開拓。

取組に至った経緯

- 矢島かぶらの消滅を危惧した生産者から相談を受け、当地区外でも生産可能であることを実証し、市内全域に生産者を増やしブランド化を実現。
- 真珠養殖から毎年1トンもの貝殻が産業廃棄物となるため、活用を検討。牡蠣殻を土改材に使用する事例を参考に、燃焼処理した「パール灰」を使用し実証栽培したところ効果を確認。生産された野菜のブランド化へ展開。

取組の成果(受賞等)

- 伝統野菜復活が地域活性化に貢献したとして、「守山矢島かぶらの会」が近畿農政局「ディスカバー農山漁村(むら)の宝」(第3回)コミュニティ部門に選定。かぶらの漬物が大河ドラマで登場するなど、特産品として知名度が向上。
- パール灰活用の取組が第11回「ディスカバー農山漁村(むら)の宝アワード」コミュニティ・地産地消部門に選定。栽培品目は15種類に増え、収穫体験や学校給食への活用により、地産地消の促進と所得向上に繋がる。

今後の展望

- 肥料として「パール灰」の商品化を検討。生産者を増やし取組拡大を図る。
- 大学と企業が連携しパール野菜を使用した総菜を開発し販売するなど、パール野菜の認知度を高め、生産・販路を拡大していきたい。



びわ湖の淡水真珠とパール灰



パール野菜(ブロッコリー)の収穫体験



パール野菜を使用した給食

大阪府豊能町

株式会社里山創生研究所



農業との
多様な
関わり

休耕農地の棚田を
再生し、ぶどう畑へ

取組内容

- 豊能町にて、有害鳥獣や棚田等の地域資源を活用し、農家宿レストラン事業、ジビエの処理加工事業、棚田を再生したワイナリー事業を展開。
- 地域の農業関係人口を増やすため、地域住民だけでなく都市住民も巻き込み、狩猟体験や田植え体験等のイベントを開催するなど、地域の活性化に貢献。

取組に至った経緯

- 料理人として、農家宿レストランで自家菜園の野菜、自ら狩猟した鹿や猪、自家製ワインを提供することが夢であった。その実現のために、利益の出続ける、持続可能な農業を模索した結果、棚田を再生してぶどうを栽培し、高付加価値のワインを作るべく活動を開始。

取り組む際に生じた課題と対応

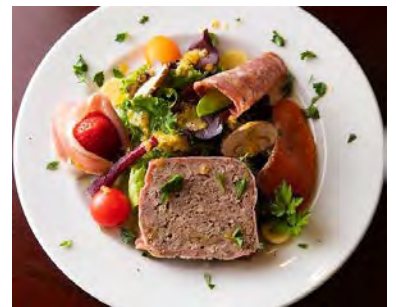
- NPO法人や、活動の様子をSNSで発信して募ったボランティア等、年齢や職業が様々な開墾メンバーと共に、刈払機で笹藪を刈り、チェーンソーで大木を切断し、パワーショベルで整地することで荒廃した棚田をぶどう畑として再生した。また、ぶどうは水はけの良い場所で育つため、水はけが悪くぶどう栽培に不向きな棚田に、暗渠排水管等を整備。

今後の展望

- 令和6年3月に醸造所が完成し、ワイン造りの地盤が固まったことから、これから試行錯誤を重ねて良いワインを完成させたい。
- 豊能町にドッグアジリティの大会が開催できる会場を作り、そこで行われるイベントに出展して、鹿カレーや、低脂質・高たんぱく栄養バランスが良い犬猫用ペットフードである、鹿肉ジャーキーの販売を目指す。



近畿農政局「ディスカバー農山漁村(むら)の宝」
(令和6年度)に選定された
(写真中央が山上忠彦代表取締役)



ジビエ料理

奈良県曽爾村

曽爾村農林業公社

農業との 多様な 関わり

高原農業の存続に向けた 中間組織による挑戦



取組内容

- 一般社団法人曽爾村農林業公社は、村の基幹産業である農林業を次世代へ受け継ぐため、2016年6月に設立。高齢化で荒廃しつつある農地を保全し、新規就農者などに継承する取組のほか、付加価値を乗せられる販路の開拓や流通網の提供により、農業者の持続可能な経営を後押ししている。各集落の地域資源を活かした特産品の開発・販売などを通じた農村コミュニティ支援も行う。

取組に至った経緯

- 曽爾村は曽爾高原など年間50万人が訪れる景勝地だが、農林業の衰退による人口減少や里山景観の荒廃という危機が訪れていた。村民や役場職員が膝を突き合わせて議論した末、「農林業の課題に向き合わずして村の存続はない」との考えに至り、官民連携で農林業を持続可能にするための公社を立ち上げた。

取組の成果(受賞等)

- 農地保全や流通網の整備、米のブランド化等により、新規就農者を呼び込む土壌を整えたほか、移住者など農業初心者が米作りや農業機械のノウハウを学べるプログラムも実施し、多様な人材による農地保全を目指している。
- 第8回近畿「ディスカバー農山漁村(むら)の宝」に選定(2024年)
- 優良ふるさと食品中央コンクール食品産業センター会長賞(2023年)
- 米食味分析鑑定コンクール国際大会・特別優秀賞(2016年、2021年)

今後の展望

- 公社が一時的に農地を保全しながら、新規就農者への継承や地域ぐるみの保全体制の構築を通じ、農地が次世代にバトンタッチされる流れを築く。
- 新規就農者が既存農家と共存しながら村に根付いていけるよう、必要な生産・販売両面のサポートを確立し、「農業を始めるなら曽爾村」というイメージの定着を目指す。
- シェアキッチン「そにのわの台所katte」を軸に加工品作りも支援し、村に暮らす人が村の価値を再認識するとともに、新たなチャレンジが起こる土壌を村に根付かせる。



「そにのわマルシェ」を通じて生産者と消費者が交流

奈良県奈良市

合同会社TEA UEKUBO

農業との
多様な
関わり



大和茶の産地から
お茶の魅力を伝えたい

取組内容

- 合同会社TEA UEKUBOでは、茶畑8.4haで茶を生産。うち40aは和紅茶用で有機JAS認証を取得。
- ティーサロン「TEA UEKUBO」を運営し、手もみ製茶の体験や茶の販売及び飲食の提供を行う。

取組に至った経緯

- 古くから栽培されてきた奈良市月ヶ瀬地区のお茶と地域資源でもある茶畑の景観を残していきたいとの思いから、高齢化等により放棄される茶畑を継承。
- 有機栽培のお茶は、農薬使用に抵抗感を持つ者からのニーズがあり、特に海外の消費者からのニーズがあると感じた。
- お茶の魅力を伝えたいとの思いから、「手もみ製茶」の実演や体験を楽しむティーサロン「TEA UEKUBO」を開業した。

取り組む際に生じた課題と対応

- 残留農薬基準に対応できる茶の生産が求められているが、日本国内と海外では残留農薬基準が異なるため、その基準を満たす農薬の種類の選定に苦慮している。

取組の成果(受賞等)

- 2017年(平成29年)全国手もみ茶品評会 農林水産大臣賞

今後の展望

- お茶の品質向上のため、今後も改植と台切りによる茶畑の若返りを心がけていきたい。
- ティーサロン「TEA UEKUBO」では、ツアー申込者だけでなく多様なお客様が利用できるティーサロンとして、お茶と飲食のコラボにより茶の魅力を発信していきたい。



「手もみ製茶」の実演や体験を楽しむことができるティーサロン「TEA UEKUBO」



玄米茶、煎茶、紅茶などを独自ブランド「しずく」として販売

和歌山県有田川町

和歌山大学観光学部 地域連携プログラム
有田川町LPP 棚田ふあむ

農業との
多様な
関わり

学生との協働による棚田保全・
集落支援活動



取組内容

- 過疎・高齢化が進む有田川町沼の棚田地域で、学生が棚田の一部を借りて、田植え、稲刈り、精米まで一連の作業を担い、棚田の景観維持に貢献。また、地域住民と学生との協働により、①棚田保全活動、②地域農業支援活動、③地域との交流活動、④地域のPR活動支援など、地元集落の活性化に向けた取組を支援。
- 令和6年度は、田植え、山椒収穫支援、稲刈り、秋祭り支援、草刈り・獣害柵の点検、地元交流会、天神祭の支援など、計7回の現地活動を実施。
- 活動に参加できない地域住民に活動内容を知ってもらうため、コロナ禍以降休刊していた地域住民向けの活動報告誌である「ふあむからあのね」を令和6年度に復刊し、沼地区の住民に配布。
- 長期にわたる地域との協同活動や学生の定期的な訪問と交流活動により、学生と地域住民は強い絆で結ばれている。

取り組みに至った経緯

- 第19回全国棚田(千枚田)サミットの開催決定を契機に、県が企画した「棚田モニターツアー」に和歌山大学観光学部生が参加。
農家の高齢化、担い手不足により、耕作放棄地が年々拡大している地域の現状を目の当たりにした学生から、「棚田保全ボランティア」のアイデアが出されたことをきっかけに、平成23年7月から「棚田ふあむ」の活動を開始。

取組の成果(受賞等)

- 令和4年度つなぐ棚田遺産感謝状(未来へつなぐ部門)

今後の展望

- 地元交流会では、1年間の活動を振り返り、有田川町沼地区の未来を考えるワークショップを開催するとともに、学生と地元住民の親睦を深めている。今後も継続的に地域と関わり続け、集落に活気をもたらし続けることができるような活動をしていきたい。また、ワークショップの際に地域住民から提案のあった「郷土料理」の継承について、新たな活動にも挑戦したい。



有田川町沼地区で行われた田植え作業

和歌山県みなべ町

みなべ町 × 一般社団法人 日本ウェルビーイング推進協議会

農業との
多様な
関わり

世界農業遺産認定地域の梅産地で、梅収穫ワークショップによる関係人口の創出と地域の活性化



©PCW Japan

取組内容

- 「みなべ・田辺の梅システム」として世界農業遺産に認定されているみなべ町で、梅収穫ワークショップ(主催・運営:一般社団法人日本ウェルビーイング推進協議会(PCW Japan))の運営メンバーが、梅農家の選定、告知、参加者の募集、梅農家とのマッチングを行い、梅農家の労働力不足の課題解決に取り組む。
- 初年度の令和4年は6月の30日間に、11戸の梅農家が参画し、主に首都圏で働く123人(のべ240人)がボランティアで参加。令和5年は5月1日から70日間に期間を拡大し、19戸の梅農家が取り組み、のべ382人が参加。また、令和6年は、梅が歴史的な不作となった状況にもかかわらず、20戸の梅農家が取り組み、のべ355人が参加。
- 梅農家は収穫期の労働力が確保できるとともに、参加者に非日常体験を提供し、参加者及び受入れ農家双方のウェルビーイング(心身の健康や幸福)の向上が図られている。国や自治体からの補助に頼ることなく、継続的な取組を通じて、関係人口の創出と地域の活性化に繋げている。
- 梅収穫ワークショップは行政主導ではなく、日本ウェルビーイング推進協議会とみなべ町の農家、町民有志が主体となり取組みが行われている。行政はサポート的な支援を行うことで、官民地域連携の良好な関係が構築されている。

取り組みに至った経緯

- 全国で「一次産業ワークショップ®」を推進する日本ウェルビーイング推進協議会の島田由香代表理事が、梅農家の繁忙期に労働力不足の課題を抱えるみなべ町関係者に、梅収穫ワークショップ(通称:梅ワー)の企画を提案。島田代表理事の熱意に共感した農家、町民有志が話し合いを重ね、みなべ町のサポート的な参画を経て、令和4年から取組をスタートさせる。

取組の成果(受賞等)

- 令和5年度地方創生SDGs官民連携優良事例に選定(内閣府)

今後の展望

- 令和4年にスタートした取組は、翌年から企業向けの人材育成プログラム「TUNAGU」として、他地域にも好影響をもたらすなど、更なる広がりを見せている。梅収穫ワークショップを通じて、みなべ町のPRや関係人口の増加に貢献し、みなべ町ならではの体験による心身のウェルビーイングの向上に取り組み、地域の活性化を目指したい。



収穫期の南高梅

(画像提供元: みなべ町)

和歌山県かつらぎ町 天野の里づくりの会

農業との
多様な
関わり

世界遺産の天野の里で
企業と連携し、農村景観を活用
したむらおこし



「紀伊山地の霊場と参詣道」として世界遺産
に登録された丹生都比売神社

取組内容

- 高野山の麓に位置するかつらぎ町天野地区で、世界遺産と美しい自然を守り、農村風景や地元農産物を活用した交流活動や歴史・文化の伝承活動を通じた魅力的な取組を実践。
- 和歌山県の「企業のふるさと」制度を活用し、平成21年から伊藤忠商事(株)と協定を調印。ブランド米である「天野米」の田植え、稲刈り等の米づくり体験や農村景観の保全活動等の交流活動に取り組む。伊藤忠商事(株)との交流をきっかけに、(株)クボタ、ヤンマー(株)等、企業との連携・交流が拡大。
- 休耕地を活用してそばを栽培し、収穫、そば打ち体験などの交流活動に取り組み、耕作放棄地の発生を未然に防止。連携する農機具メーカーから機械の提供により、そばの作付面積が拡大。
- 総務省の事業を活用し、竹パウダーを製造する機械を導入。伐採した竹を粉碎し、製造した竹パウダーを活用したぬか床や土壌改良資材として商品を開発し、地元直売所やサービスエリアの売店で販売するなど、放置竹林の竹を有効活用する取組に挑戦。
- 過疎対策として、移住希望者の田舎暮らしのサポートを行い、都会から定住受入を実現。かつらぎ町が移住希望者の受入窓口となり、「天野の里づくりの会」がサポートを実施。天野の美しい自然に魅せられ、移住世帯は全世帯の約3割を占める。

取り組みに至った経緯

- 平成16年に「紀伊山地の霊場と参詣道」が世界遺産に登録されたことをきっかけに、天野の自然や歴史・文化を生かした魅力的で将来を見据えた「天野の里」を作るため、平成18年12月に「天野の里づくりの会」を発足。

取組の成果(受賞等)

- 平成23年度「豊かなむらづくり全国表彰事業」農林水産大臣賞
- 令和元年度「過疎地域自立活性化優良事例表彰」総務大臣賞

今後の展望

- 企業との異業種交流により、住民意識が変革し、天野の良さを再認識するとともに、自分たちが住んでいる天野の里に自信と誇りを持つことができた。この自信と誇りを原動力として天野の里の活性化に繋げていきたい。



天野の里物産販売所「ようよって」
米、トマト、きゅうりなど地元の生産物を販
売(営業は土・日・祝日のみ)